ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「出てこなかった？」

　思わず安堵してしまったのはひとまず置いておいて、雅也は首を傾げた。来夢音はコクンと頷く。森の入口からここまでは結構な距離があり、俄かには信じられない話だ。

　だが確かに、ここまで怪我無く来ているのも事実だった。

「僕達の時は、ここに来てすぐにルチャブルに襲われたんだけどなぁ……」

「そうなの？　ルチャブルなんていたんだ。知らなかったわ」

「ここ、来夢音の別荘じゃん……なんで知らないの？」

「だ……だって、私と白がここに来ると、いっつもほかのポケモンがいるんだもん。ルチャブルなんて、見たことないわ」

　呆れたような口調の雅也に、来夢音は頬を膨らませて文句を垂れる。二人はそれでも、歩みを止めなかった。二人共関係無いお喋りをしつつも、白のことが心配なのだ。特に来夢音は、軽口は叩けども目は先程からキョロキョロとせわしなく動いていた。

「ここにはよく来るの？　白が、暴れるポケモンがいるって言ってたけど」

「ああ、その子なら、よっぽどおくまで進まなければだいじょうぶ。ここら辺なら、まず出くわすことはないわ」

「そうか……ちなみに、暴れているのは、どんなポケモン？」

　そう言えば、と思って、雅也は聞いた。これは、まだ白から聞いていなかったのだ。さっきまでは白も一緒だったため、そいつに出会ったら白が教えてくれるだろうと思っていたのだが、今、彼はいない。今は一緒に行動しているが、今度は来夢音とはぐれないなんて保証も無いので、一応頭には入れておきたかったのだ。

「え……っとね。リングマよ。ほら、私のポケモンと同じ子」

「ああ。そう言えば、今日の拓馬達とのマルチバトルの時、出してたっけ？　戦うまでもなく、オーダイル達が自滅しちゃったけど」

　リングマというのは、まるでツキノワグマのような、全身が茶色い毛で覆われた、胴体に黄色い輪っかの描かれたポケモンである。かなり体格が良く、そして強面だ。一応言っておくと、進化前であるヒメグマは、小熊のような感じで実に可愛らしい。

　来夢音の持っているリングマはドラピオン同様、護衛のポケモンとして訓練されたポケモンなのだが、彼女はヒメグマの時から付き合いがあった。まあ、それを言ってしまうと、ドラピオンも進化前のスコルピの時から彼女は付き合いがあるのだが。進化した時、随分怖くなってしまったので、白も含めて周りの人、そしてリングマ自身も、来夢音がショックを受けてしまわないかどうかヒヤヒヤしたらしい。しかし、こう言っちゃ難だが意外な事に、来夢音は『たくましくなった』と満面の笑みで喜んだとか。子供の思考は分からない。

　ちなみに、それを聞いた白はその日から筋トレ（と言っても、ちょっと重い物を持ち上げたり下ろしたりする程度のことだが）を始めたのだが、今のところ、見た目通り結果は伴っていない。

「でも、リングマか……ちょっと強そうだね……」

「うん……きっと、優さんでもかてないかも。一匹じゃないのよ？　いっぱい来ちゃうの」

　来夢音の言葉に、思わず嫌な顔をしてしまった雅也。自分の師匠と深い交流があるような人物が苦戦するかもと言われれば、そんな顔をしてしまうのも仕方が無い。それなりに実力は伴っているはずである。

　それに、複数で襲ってくると聞いてしまえば、そんな顔をするなと言う方が無理な話だろう。

　はぁ、っと深く溜息を吐いて、下を見た雅也。その時、

「あれ？　この足跡……」

　暗くて分かりにくいが、何かが通った跡があるのを見つけた。それだけならどうでも良いのだが、雅也はこの足跡に、どうも見覚えがあったのだ。

「……？　どうしたの？」

「あ、うん。ここ、何か通ったみたい。どっかで見たことあるんだけど、なんだろう？」

　そう言って、雅也は足跡を指さした。すると、キョトンとしてそれを覗き込んだ来夢音は、途端に肩を震わせ始める。何事かと来夢音に話しかけようとした雅也は、彼女の顔がみるみる内に青くなってくのに気がついた。

「ど……どうしたのっ？」

「こ……これ……」

　震える声で、来夢音は囁いた。

「リングマのあしあとだわ……」

「なんだっ――」

「わぁぁぁっ！」

　叫び声が叫び声によってかき消された。二人がビクっとしたのは言うまでも無いだろう。今もその叫び声が、雅也は勿論、特に来夢音の頭の中で何度も反芻していた。その声は、ややか細さを残しつつも、人の耳に良く通るような声。それは、来夢音が、恐らく彼女が一番聞いている声だった。

　そして、今のは白が何か危険なことに巻き込まれたような、そんな声だ。

　気が付けば、声のした方に走り出していた来夢音。少し遅れて雅也も跡を追うが、彼女はそんなこと全く気にも止めていない。

「白、白、白……」

　まるで呪文のように白の名前を呟きながら、来夢音はさらに加速する。こういう時、背中に乗っけて走れる、例えばギャロップとかゴーゴートとかがいれば大いに助かるのだが、生憎そのようなポケモンは来夢音は持っていなかった。

　声が割と近い所から聞こえてきたのは幸いなことだっただろう。

「白っ！」

　走り始めてから一分と少々。森の中を駆け抜け、一面に木々が覆っていた彼女の目の前は、急に開けた。

　そこは、行き止まり。後ろは土壁に阻まれ、白はそこにもたれかかっていた。息を切らしながら、何やら自分のポケモンである、プララやマナナ――マイナンのことだ。プラスルの赤と＋とは対称的に、青と－のポケモンである――そしてピジョンに指示を飛ばしていた。三匹とも、かなり疲弊している。

　白が無事だったことに安堵しつつも、来夢音はキッと目線を鋭くさせた。視線の先には、まるで不良が集っているかの如く白を囲んでいる……五匹のリングマ。

　真ん中のリングマが一番体格が良いので、おそらくあのリングマが群れのボスだろう。

「お……お嬢様っ？　ご無事でしたかっ？」

　白が、やって来た来夢音を見て声を上げた。

　だがリングマ達は、やって来た来夢音には気がついていないようだ。彼女や白が叫んだにも関わらず、白や白のポケモン達への攻撃を緩める気配は無い。そんなリングマ達に、来夢音の中で何かがプツンと音を立てて切れた。

「白を……」

「ら……来夢音……！　やっと追いついた……って、白っ？」

　息を切らせ、ようやくここまで走ってきた雅也が、白を取り巻く光景を見て思わず叫んだ。

　だが、その声は来夢音の耳には届いていない。

　可愛らしい目は、リングマ達を睨んでいた。そして、目にも止まらぬスピードで腰に両手を伸ばす。そして、

「白をいじめないでっ！」

　思いっきり、来夢音はボールを投げた。